

# 観光地づくりの本質を探る

## ——観光まちづくりの「心」とは

観光地づくりの本質とは何か？

観光地におけるまちづくり＝観光まちづくりの成果は、単に観光客数だけでは測れません。では、その「心」とは何でしょうか。当財団と長くお付き合いいただいている鈴木忠義氏へのインタビューと3つの観光地の事例を通じて、“地域が自ら考え、行動する自立した観光地”へと構造を変えていく観光地づくりの本質について探ります。

# 人間の「喜び」と「生きがい」を生む 観光地づくり

東京工業大学  
名誉教授

鈴木 忠義

観光の体系化に早くから取り組んでこられた日本観光研究学会の初代会長・鈴木忠義氏（東京工業大学名誉教授）に、長年にわたる実践を通して育んでこられた観光地づくりの基調となる考え方について語っていただきました。

### 終戦後の「観光立国」

——観光との出会いは、いつ、どのような時代だったのでしょうか。

【鈴木】もともと好奇心や探究心が強くて写真や旅行が好きだったこともあり、終戦後「観光立国」

が盛んにいわれていた昭和二十三年、僕が東京大学土木工学科三年生の時に、新聞広告で見つけて東京都総務局観光課による観光講座「観光の理論と実際」を受講したのが観光との出会いです。当時の有識者たちが講師陣（図1）で六日間の講座を六年間、東京都は本当に真剣にやっていました。観光というのは、これくらい本腰を入れて考えるべきものなのです。昭和二十五年に朝鮮戦争が始まった途端に工業が優先となり観光どころではなくなつて、やがて閉

講となりましたが、講師でいらしていた林学博士の田村剛先生（注1）、

当時東京都建設局長の石川栄耀先生（注2）の講義に感銘を受けました。また、大学の授業に農学部からいらしていた加藤誠平先生（注3）にも大変お世話になり、僕自身はこの道に入る縁ができました。

### 観光の知の体系化と人づくり

——観光の知の体系化の試みは、どのような形で始めたのでしょうか。

【鈴木】昭和二十四年、東大農学部林学科造園学教室（研究室）に就職してから十二年半の間に、趣味と

## 図2 『観光開発をどう考えるか』目次

- 1 観光活動の社会的背景
- 2 だれが観光旅行をしているか
- 3 なにが観光の対象になっているか
- 4 観光のしかたはどうなっているか
- 5 観光消費はなにを意味するか I
- 6 観光消費はなにを意味するか II
- 7 観光活動とは
- 8 観光開発と立地条件
- 9 観光開発の留意点
- 10 風景の保護と育成
- 11 風致の造成と破壊
- 12 産業と風景
- 13 各種事業の観光開発への協力
- 14 文化財と観光
- 15 交通施設
- 16 宿泊施設
- 17 園地と小施設
- 18 休憩舎・便所・展望台
- 19 売店・食堂
- 20 総合休憩施設
- 21 スポーツ・レクリエーション施設
- 22 観覧施設

出典：鈴木忠義著・日本観光協会 昭和36年発行

## 図1 第1回観光講座(昭和23年)の講義プログラム

- I. 総論
  - 1 観光立国論 高田寛(参議院議員 日本交通公社理事長)
  - 2 観光産業論 木村禎八郎(参議院議員)
- II. 観光事業の理論
  - 1 観光事業概論 新井堯爾(全日本観光連盟 副会長)
  - 2 観光資源論 田村剛(林学博士)
  - 3 観光と都市計画 石川栄耀(東京都建設局長)
  - 4 観光東京の今昔譚 安藤直方(東京都史編纂委員)
- III. 観光事業の経営
  - 1 観光事業経営論 小林新(早稲田大学教授 商学博士)
  - 2 サービス論 徳川義親
  - 3 観光宣伝論 新保民八(株式会社花王 常務取締役)
  - 4 見返品と観光物産 宮田勝善(観光物産連合会 理事)
  - 5 新たに発展を予想される観光事業の話 武部英治(全日本観光連盟 事務局長)
  - 6 観光施設論 間島大治郎(運輸省観光課長)
  - 7 接客の実際 高久甚之助(日本ホテル協会 理事長)
- IV. 国際観光一般
  - 1 戦後の海外観光事情 春山行夫(雄鶏通信 編集人)
  - 2 アメリカの印象 高田市太郎(毎日新聞 欧米部長)
  - 3 欧州旅日記 渡邊紳一郎(朝日新聞 編集局総務室)
  - 4 観光と自然 松方義三郎(共同通信 編集局長)
  - 5 ガイド商売往来 殖粟文夫(リーダーズダイジェスト日本支社)
  - 6 日本風土記 中村孝也(文学博士)

出典：東京都総務局観光課「観光の理論と実際」(第1回観光講座全集) 昭和24年発行

実益を兼ねて観光関係の調査・研究、写真を蓄積し、昭和三十六年に工学部専任講師着任のタイミングで『観光開発をどう考えるか』(発行…日本観光協会、現・社団法人日本観光振興協会)を出しました。これが僕の観光に関する考察の原点であり、その後の講義のベースにもなっています。目次(図2)をチェックすれば、観光の構造を考える上で本質的なものがそろっているはず。冒頭の「1 観光活動の社会的背景」や「2 だれが観光旅行をしているか」の部分では、一人あたりの所得及び個人消費支出の推移などを説得力あるデータで示しましたが、全体としてはフォトエッセー風で「美しくないと観光地は人が来ない」ということを写真に語らせました。

つという方針で育ててきました。その人材が、社会及び個人にとって意義あることをやっていると思える環境を整えることにも注意したつもりです。

「学」とは「知の体系化」です。観光は後発の学問かつ広汎で、その体系化は簡単ではありませんが、「観光学」という分野として立ち行くためには、経済学や文学、心理学など他の分野から学びながら、概念(観光とは何か)と意味論(観光にどのような効用があるか)を確立しなければなりません。その上で人材育成のための良い教科書をつくることは、これから財団が主体的に取り組まなければならない仕事だと思えます。

**「観光」が  
目指すべきもの**

人間の好奇心や探究心に応え  
「喜び」や「生きがい」に資する

——これから「観光」が目指すべきことは、何でしょうか。



白板を活用してインタビューに応える鈴木忠義氏

**鈴木忠義(すずき ただよし)**

東京大学、東京工業大学、東京農業大学にて教鞭を執る。観光開発・景観工学・地域開発を関連づけて研究する。(株)世田谷川場ふるさと公社社長として35年間にわたって交流事業を推進。公益財団法人日本交通公社専門委員、理事、評議員(現在)として約50年にわたり指導。大正13年東京生まれ。

【鈴木】小さい子供がバスや電車に乗るとすぐに窓の外を見たがりです。その好奇心や探究心は「観光」の原点に通じるものがあります。人間が本来持つ好奇心や探究心に応え、人間の「喜び」や「生きがい」に資することが「観光」の本質だと考えます。人間の生活には経済基盤がないと困りますが、経済はあくまでも手段であって、真に求めているのは「喜び」や「生きがい」なのです。心理学の対象はノイローゼや精神疾患などネガティブな要素のことが多くて、ポジティブな要素である「喜び」に関する部分は十七分の一(約六%)しかないといわれています(注4)。観光とはま

さにその貴重な部分を担わせてもらっていることを認識して、「喜びの心理学」の基礎研究も必要でしょう。——「喜び」や「生きがい」というのは人間が「観光」に求める普遍的なものですね。一方で、「観光」の対象は時代によって大きく変わってきていきますよね。

【鈴木】まさにそうなのです。「観光」の対象が変わるといことは、前述の観光の概念と意味(効用)論も時代によって変わっていくということなのです。だから、観光に携わる人々は変化を前提として研鑽を積み、普遍的な部分は大切にしながらもみんな

が納得できる説明ができるように努めないといけません。

また、「観光」に求める意味(効用)は、主体によっても異なりますので主体別に考えることも大切です。私は常々三つの主体で考えています。第一主体は観光客、第二主体は地域(住民+行政)、第三主体はその他の観光関係者で、財団のような専門家は第三主体に含まれます。第三主体の人には、第一主体と第二主体が求めることを十分踏まえた上で、近江商人の商道徳である「売り手よし、買い手よし、世の中よし」ならぬ「三方よし」を求めてより良い方向性を提案していくことが、これから益々求められるでしょう。

## 「喜び」や「生きがい」の創出に資する「観光地づくり」とは

観光地づくりは

演劇や音楽のような「時間芸術」

——ここからは、人間の本質である「喜び」や「生きがい」を追求する「観

光地づくり」について考えを聞かせてください。

【鈴木】人間の「喜び」や「生きがい」を追求するというのは、演劇や音楽のような「時間芸術」と同様なので、置き換えて考えてみると面白いです(図3)。「どういう舞台にするか」ということは「どういう観光地にするか」ということになります。舞台上で、「観光客(第一主体)」に「地域(住民+行政)(第二主体)」と共に「役者」としての役割を担ってもらうことが求められます。そのためには、「稽古」をしてもらわなければなりません。それは、「観光客」にとっては感動できるように日々自分を磨くこと、「地域」にとっては「観光客」と自らが「喜び」を感じられるよう技と価値観を高めることです。

そして、良い舞台には良い大道具・小道具が欠かせないように、「大道具」としての「地域」が有する観光資源(自然・歴史・文化)がベースになって、「小道具」としての「観光魅力」を創出するための取組みも生きてくるのです。「小道具」だけを考えていてはいけません。また、あ

図3 「観光地づくり」構成要素～演劇要素との対比から

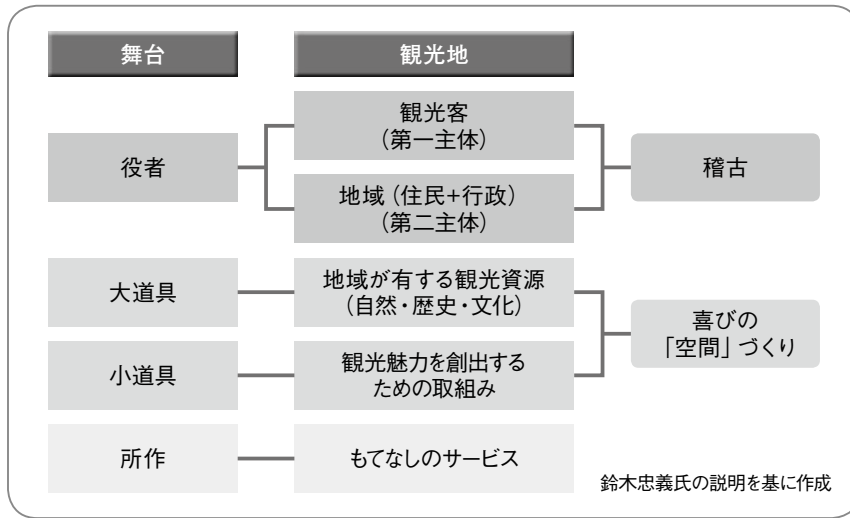
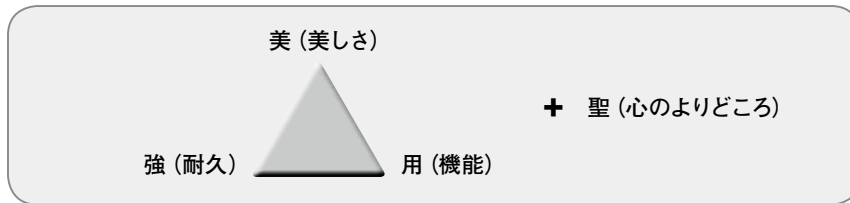


図4 観光魅力を創出する時に考えるべき要素



出典：財団法人日本交通公社「平成14～17年度 観光基礎講座 鈴木忠義氏レジュメ」

らゆるものについて「所作」としての「もてなしのサービス」がきちんとしていないと、「役者」も「大道具」も「小道具」も生きてはきません。その上で、「時間芸術」なので、時間要素を加味してどういう順序で組み立てて見せていくかも重要です。

——観光地づくりのベースになる「大道具」としての「地域が有する観光資源（自然・歴史・文化）」を考える時に、気をつけるべきことは何ですか。  
【鈴木】肖像画は背景で描くともいうように、背景が悪いと良い舞台はで

きないということを意識しておかねばなりません。特に、日本の田園風景は、人の手が入ることその魅力を持っています。それが、その地域のみんなが取り組まないと成り立ちません。そうやってみんなの手をかけて地域の風景とその基盤にある生業を守っていくことが「まちづくり」であり、それを目の当たりにすることは、そこで育つ子供たちの教育や躰しづなにもつながります。

——「大道具」を踏まえながら、舞台にいろいろな「小道具」としての「観光魅力を創出するための取組み」をしつらえるにあたっては、どのような考え方が大切ですか。  
【鈴木】やはり古代ローマの時代からいわれている「用・強・美」の三位一体と「聖」が人間の文明・文化をつくってきたのだから、それが基本です（図4）。「用」は機能を満たし役に立つこと。「強」は安全で丈夫で長持ちすること。そして、美しくないとはいけません。「聖」は、演劇への置き換えでは主に「大道具」に相当する部分となりますが、「小道具」

具」をしつらえていく時に尊重しなければなりません。鎮守の森や東京の飛鳥山などを思い浮かべてもらえたら分かると思いますが、地域の人にとって「心のよりどころ」であり、観光客をも惹ひきつける大切な場なのです。

「観光人」は感受性と先見性を持った「目利き」であれ

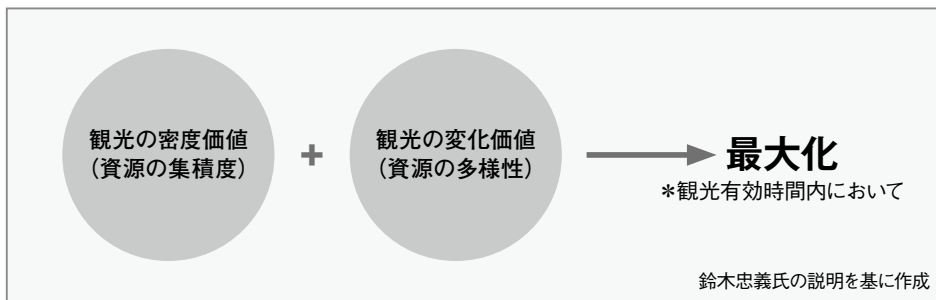
——「観光地づくり」に携わる人間はどうあるべきでしょうか。  
【鈴木】人間は常に「イノベーシオン」を追求し、文明の力を享受しながら生活を豊かにしていこうという生き物なので、観光に携わる「観光人」（第三主体）には感受性と先見性が必須です。一方で古いものや良いものの中に「聖」を見分けることができなければなりません。すなわち本質を見抜く高度なセンスを持った「目利き」でなければならぬのです。広く見聞して、その地域では「何が人間の『喜び』につながるのか」「何が『生きがい』となりうるのか」を的確に捉え、「観光地づくり」につ

なげていかなければなりません。

——その秘訣は何でしょうか？

【鈴木】「観光地づくり」では、人間の子どもを育てるのと同じようにその

図5 観光の密度価値と変化価値



最大化

\*観光有効時間内において

鈴木忠義氏の説明を基に作成

地域の固有の素質、良いところを伸ばしてあげることがまず大切です。

観光では、観光客がわざわざ「時間」と「お金」をかけて来訪するだけの

価値が地域にあるかどうかという観点から考えます。一日二十四時間のうち観光有効時間はおよそ八時間。

この時間内において観光の「密度価値(資源の集積度)」と「変化価値(資源の多様性)」(図5)を最大化させるために、どう創り上げていくかということなのです。

概念を共有し、行動を一貫させ、住民の「喜び」や「生きがい」につなげる

——例えば、長年にわたって現場で指導している川場村(群馬県)ではどのように進めてきたのでしょうか。

【鈴木】川場村とは世田谷区の区民健康村づくり事業「第二のふるさと」構想の場所選定で川場村に決める前からの関わりで、三十五年になります。「わが村、わが庭」を合言葉に「健康で幸せに長生きしよう」と言い続けています。堅い言葉で言

えば概念を共有し、一貫した行動をしていくということです。どのような考え方で、何に価値を置くかを明確にして、関係者みんなが共有することが大切です、それを一丸となって行動に移していけば長続きするのです。時間はかかりますが、迎える住民も納得して観光客を迎えることができるようになりますので、良いおもてなしにつながります。「人とのつながり」の楽しさを実感し、それが来訪者と住民の「喜び」や「生きがい」となり、次のエネルギーにつながっていくのです。人が地域に來訪してくれるというのは素晴らしいことで、人だけでなく、お金も物も情報も入ってきて、新しい仕組みも生まれるのです。

——三十五年の間となると関わる人も変わると思いますが、続ける要因は何でしょうか？

【鈴木】まず経済的にうまくいっているということがあります。また、農作物等を介して観光客との交流が生まれ、それが住民の「喜び」や「生きがい」につながっていることも大きいと思います。物まねや付け焼き刃ではなく、「川場村ならではの価値」を地域の人々と一緒に追求してきました。そして、今一番の課題は滞留時間を延ばすことです。二時間滞留すれば必ず飲食するので経済効果が出てきますし、観光客と住民との接点、交流も増えて相互に「喜び」や「生きがい」も増すのです。そのためには、川場村では歩いて楽しめる路傍の景観づくりとして、村の各所に「喜びの空間」をつくっていかうと話しています。

観光はまちづくりの総仕上げ

——「喜びの空間づくり」とは、どのようにしていったらよいのでしょうか。

【鈴木】「づくり」という言葉には空間なり資源なりをうまく運用していくソフトも含まれ、ソフトとハードが相互に関係し合いながら混然一体として魅力的な「場」をつくっていくことを意味します。例えば、造園関係の人には「飛び出せ造園」といっていますが、「園」の中にとどまらず、人間が生活する空間全体を対

きいと思います。物まねや付け焼き刃ではなく、「川場村ならではの価値」を地域の人々と一緒に追求してきました。そして、今一番の課題は滞留時間を延ばすことです。二時間滞留すれば必ず飲食するので経済効果が出てきますし、観光客と住民との接点、交流も増えて相互に「喜び」や「生きがい」も増すのです。そのためには、川場村では歩いて楽しめる路傍の景観づくりとして、村の各所に「喜びの空間」をつくっていかうと話しています。

観光はまちづくりの総仕上げ

——「喜びの空間づくり」とは、どのようにしていったらよいのでしょうか。

【鈴木】「づくり」という言葉には空間なり資源なりをうまく運用していくソフトも含まれ、ソフトとハードが相互に関係し合いながら混然一体として魅力的な「場」をつくっていくことを意味します。例えば、造園関係の人には「飛び出せ造園」といっていますが、「園」の中にとどまらず、人間が生活する空間全体を対

きいと思います。物まねや付け焼き刃ではなく、「川場村ならではの価値」を地域の人々と一緒に追求してきました。そして、今一番の課題は滞留時間を延ばすことです。二時間滞留すれば必ず飲食するので経済効果が出てきますし、観光客と住民との接点、交流も増えて相互に「喜び」や「生きがい」も増すのです。そのためには、川場村では歩いて楽しめる路傍の景観づくりとして、村の各所に「喜びの空間」をつくっていかうと話しています。

観光はまちづくりの総仕上げ

——「喜びの空間づくり」とは、どのようにしていったらよいのでしょうか。

【鈴木】「づくり」という言葉には空間なり資源なりをうまく運用していくソフトも含まれ、ソフトとハードが相互に関係し合いながら混然一体として魅力的な「場」をつくっていくことを意味します。例えば、造園関係の人には「飛び出せ造園」といっていますが、「園」の中にとどまらず、人間が生活する空間全体を対

きいと思います。物まねや付け焼き刃ではなく、「川場村ならではの価値」を地域の人々と一緒に追求してきました。そして、今一番の課題は滞留時間を延ばすことです。二時間滞留すれば必ず飲食するので経済効果が出てきますし、観光客と住民との接点、交流も増えて相互に「喜び」や「生きがい」も増すのです。そのためには、川場村では歩いて楽しめる路傍の景観づくりとして、村の各所に「喜びの空間」をつくっていかうと話しています。

観光はまちづくりの総仕上げ

——「喜びの空間づくり」とは、どのようにしていったらよいのでしょうか。

【鈴木】「づくり」という言葉には空間なり資源なりをうまく運用していくソフトも含まれ、ソフトとハードが相互に関係し合いながら混然一体として魅力的な「場」をつくっていくことを意味します。例えば、造園関係の人には「飛び出せ造園」といっていますが、「園」の中にとどまらず、人間が生活する空間全体を対

きいと思います。物まねや付け焼き刃ではなく、「川場村ならではの価値」を地域の人々と一緒に追求してきました。そして、今一番の課題は滞留時間を延ばすことです。二時間滞留すれば必ず飲食するので経済効果が出てきますし、観光客と住民との接点、交流も増えて相互に「喜び」や「生きがい」も増すのです。そのためには、川場村では歩いて楽しめる路傍の景観づくりとして、村の各所に「喜びの空間」をつくっていかうと話しています。

観光はまちづくりの総仕上げ

——「喜びの空間づくり」とは、どのようにしていったらよいのでしょうか。

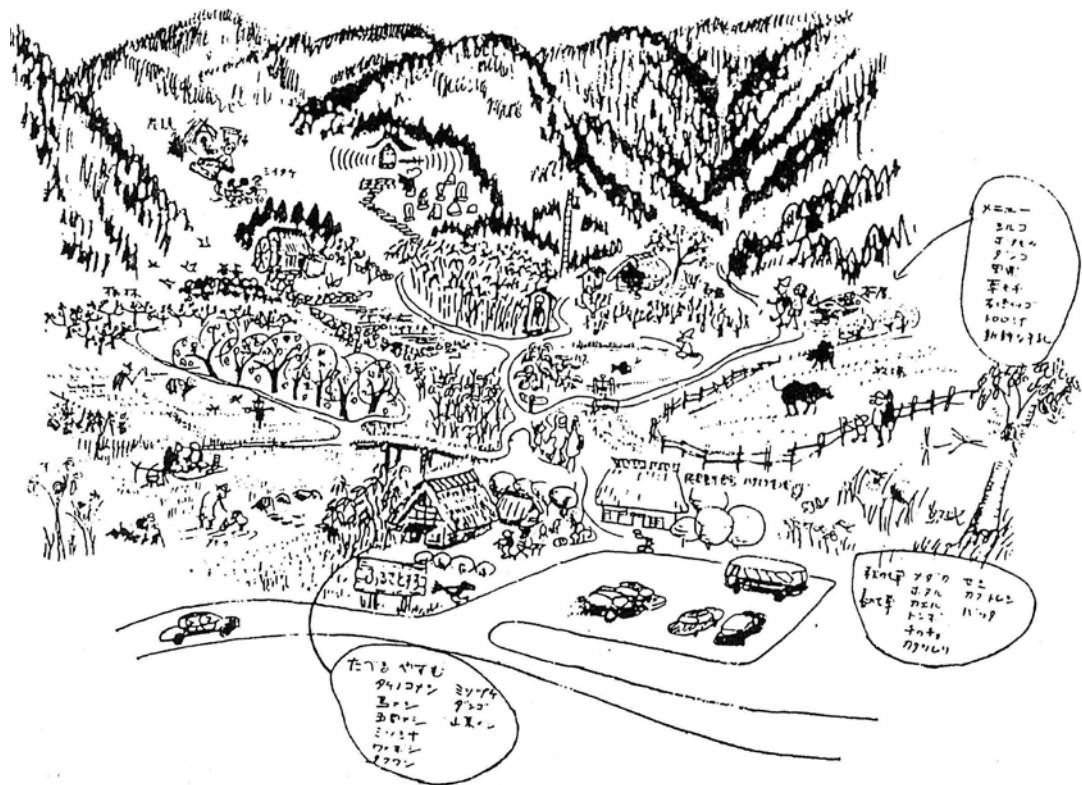


図6 鈴木忠義氏が中山間地において35年にわたり愛用している童謡唱歌をモチーフとした「喜びの空間」のイラスト(大橋清二氏・画)

象にして伝統的な造園技術を応用して「場」を創造することが必要という意味です。また、川場村のように史跡が乏しいところは各地にありますが、そのような地域ほど生活文化の魅力を高めていくことが求められます。生活の基本的な要素である「衣・食・住」について、文化を構成する「学問・芸術・教育」という観点から考えて質を高めていくという事です。それがまちづくり、村づくりの母体になります。一見足りないと思われるものも地域の創意工夫で補えるものなのです。

そうやって、まちづくり、村づくりをきちんとやって「喜びの空間」をつつていき、最終的には地域の生活文化を向上させていくことが一番大切な事です。それこそが外の人を惹きつけ、地域の人にも観光客にも「喜び」と「生きがい」を生む息の長い「観光地づくり」につながるのです。

(すずき ただよし)

聞き手・研究調査部 梅川智也

石山千代

\*二〇二二年七月二日(月)、八月六日(月)のインタビューを基に構成

〈参考〉

鈴木忠義氏の考え方を端的に表現したレジュメを紹介します。

地域に生活している人々が、発見の喜び・創造の喜び・守る喜び・参加の喜び(これらは生きがい感)に浸りつつ、地域を美しく磨き上げていくとき、他の地域から多くの人々(観光客)がその「光」を「観に」訪れる。これにより観光は成立する。そのとき多岐にわたり、相互に社会的、経済的な効果が発生する。

出典：財団法人日本交通公社「平成17年度観光実践講座 鈴木忠義氏レジュメ(はじめに)」

(注1) 田村剛(二八九〇～一九七九) 林学博士。

日本の造園学の確立、国立公園、海中公園制度の確立に尽力。『造園概論』(一九一八)等。

(注2) 石川栄耀(二八九三～一九五五) 東京都建設局長を務め、日本都市計画学会の設立に深く関与。『都市計画及び国土計画』(一九四二)等。

(注3) 加藤誠平(一九〇六～一九六九) 東京大学農学部林学科名誉教授(森林利用学)。「橋梁美学」(一九三〇)、鈴木忠義との共著「観光道路」(一九五五)等。上高地の二代目河童橋の景観設計。

(注4) 参考：『感情力』(フランソワ・ルロール、クリストフ・アンドレ共著、高野優訳、紀伊國屋書店、二〇〇五)